

《研究ノート》

リッチバラとポートチェスター
——遺跡から古代が見えるか——

南川高志

1. 遺跡から古代が見えるか

「歴史学者は足で稼げ。」

学生時代からそんな言葉をよく聞いた。これは、西洋史学の分野では、中世史や近代史を専攻する方の場合なら、未公刊の手稿史料などを求めて各地の修道院や図書館、文書館などを訪ね歩くことを指すのであろうが、古代史の場合は、稀に文献史料の写本探索や碑文現物調査の場合もあるものの、ほとんどの場合、遺跡を調べて回ることを指しているといつてよい。西洋古代史研究にとって、文献史料の研究が重要であることに異論の余地はないものの、今後の発展を考えれば、考古学との結びつきの重要性はいくら強調してもし過ぎることはないであろう。近い将来、日本の西洋古代史研究者も、考古学者と同様に、海外で本格的な発掘調査や地表踏査、そして博物館収蔵資料の計測などに、ごく普通に従事する可能性も大きいと感じている。

現在でも西洋古代史を専攻する日本人の研究者や大学院生が、発掘などはしないものの、ギリシア・ローマ時代の遺跡を数多く訪ねていることは私もよく承知している。治安に不安がある地域に残る古代の遺跡を訪ねている若い研究者も、私の周囲に少なからずいる。一般の日本人観光客もローマやアテネなどの有名遺跡をたくさん訪ねているのであるから、専門家が珍しい遺跡を訪ねるのは当然かもしれない。しかし、実際に古代史を専攻する研究者がこれらの遺跡を訪ねて、観光客とは違うどのような行動や観察をしているのであろうか。あるいはできるのであろうか。イギリス国内に点在するローマ時代の遺跡を訪ね歩きながら、私はよくそんなことを考えた。

私の場合、家族や友人など同行者がいる場合は、同行者のペースにあわせて、せいぜい写真を撮る程度にとどめたが、一人で訪ねたときには、カメラやビデオ・カメラを使って記録するだけでなく、事前に連絡して地元の考古学者や遺跡の専門家の話を聞いたり、発掘報告書や地図・平面図を片手にくまなく歩き回り、時には持参した巻き尺で寸法を測って記録してみたりした。例えば、イングランド北部のローマ軍要塞の遺跡ウィンドランダでは、遺跡管理者のロビン・バーリー博士に遺跡をつぶさに案内してもらったし、イングランド中部のリンカン市でも、ケンブリッジ大学の友人が前もって連絡してくれたおかげ

で、ローマ時代のリンカン研究の第一人者マイケル・ジョーンズ氏の丁寧な案内と解説を受けることができた。しかし、これで果たして充分なのか、いつも不安であった。考古学者は専門的な技術を生かしてさまざまな調査活動を実践するであろうが、主として文献学のトレーニングを受けてきた日本の西洋古代史の専門家が、遺跡を訪ねてどのように行動しているのか。私はずいぶん前からこれを尋ねたいと思いつつながら、公式の場ではなかなか聞くことができないでいる。

ところで、われわれは遺跡に立つと、そこに残された遺構や出土物から古代の様子を想像するのが常である。損壊の激しい建築物などでも、考古学者の研究成果に基づく復元図などが手元があれば、学問的にかなり正確な想像が可能となる。今から四半世紀も昔のことであるが、初めてローマを訪れた私は、ローマ市周辺の遺跡に関する小型のガイドブックを博物館で買ったが、それは遺跡の写真のページにセルロイド製の復元図のページを重ねることで、今は損壊している建築物の昔の姿を知ることができる仕掛けになっている。その復元が正しいのかどうか確信はないが、その手軽さに負けて、今でも時々ながめている。

初めて訪れた遺跡に立つと、それが従来書物などから想像していたものと異なることを知り、新たな感激を覚えることは稀ではない。しかし、その段階を越えて、古代の様子を遺跡から正確に推測しようとする、それは容易なことではない。古代に着色されていた建物などは今日ではその華やかさを偲ぶ余地もないし、ポンペイのように町が全体にわたってかなり発掘されているところでも、往事の賑わいはまったく正確さを欠いた想像をするほかないのである。コンピュータ・グラフィックスという便利な手段ができて以来、機械に弱い私は、機械仕掛けの再現映像をつい信じ込んでしまいそうになるが、同時にこう



した再現映像が精度の点でどの程度の信頼性があるものなのか、確信は持てない。

さて、この小文で私は、イギリスにある二つのローマ時代の遺跡を紹介したい。それらはローマ時代には同じ役割を有した。つまり、ともに古代末期のブリテン島を海からの侵攻に備えて守るための要塞であったのである。現在この2遺跡を訪ねると、古代とは違った状況に今日おかれていることがわかる。そこからわれわれはいかにして古代を見ることができようか。

2. リッチバラ遺跡

「二晩ののち、ロンディニウム街道をいそいできたアクイラと迎える兵士は、ルトピエの砦まで、あと一キロ半のところまで近づいていた。巨大な灰色のルトピエの砦は、町並みや河口の平たいタナタス島を圧して、そびえていた。サクソン族が勢力をはっている海べにあるこの砦は、これまで多くの歴史的なできごとをみまってきた。ブリテンにいた最後のローマ正規軍団もここに駐屯していたことがあったのだ。」

この文章は、イギリスの作家ローズマリ・サトクリフ（1920～1992年）の少年少女のための歴史小説『ともしびをかかげて』（1959年）から猪熊葉子訳（岩波書店刊）で引用した一節である。ここにルトピエという名で登場するのが、現在ローマ遺跡の残るリッチバラ（Richborough）である。サトクリフはカーネギー賞を受賞したこの作品以外にローマン・ブリテンに取材した小説を3冊書いているが、そのうちの1つ『銀の枝』（1957年）にも、この要塞は以下のような記述に現れる。同じく猪熊訳で引用しよう。

「風が猛りくるう秋のある日、一艘のガレー船が、ブリテンの大きく蛇行したある川にへさきをむけて進んでいた。その広い河口にルトピエの港があった。引き潮だった。満潮の時には隠れてしまう両方の土手は、イソシギだのクサシギだのが賑やかに鳴きかわして、生き生きとした感じが漂っていた。そして、荒涼とした砂丘と強い塩の匂いのなかから、ルトピエがしだいにその大きさを増しながら船に接近してきた。長い海岸線の突出部は鯨の背のようだった。灰色の砦の塁壁がそそり立ち、その下には造船所の小屋が群れていた。」

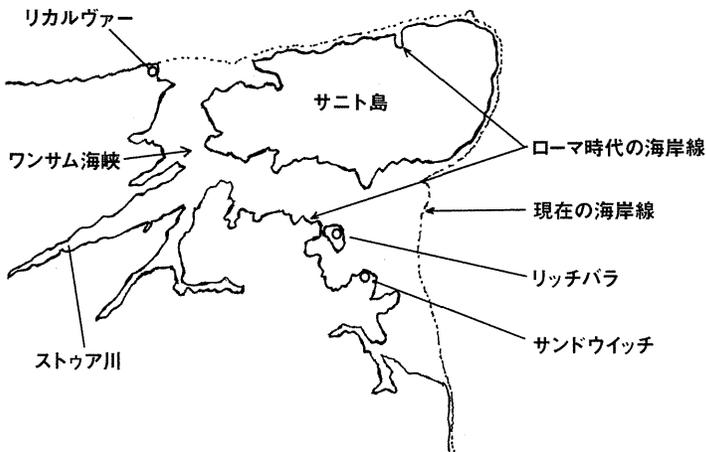
ルトピエ、ないしルトピアエ（Rutupiae）は、イングランドの南東部、ケント州の北東端に近いところにあった要塞である。サトクリフの叙述に見えるように、この要塞は、そこから川（実は海峡）へと進む入口付近に位置する港に隣接していた。

現在リッチバラの遺跡を訪ねるには、車なら便利であるが、公共交通機関なら、ロンドンのチャリング・クロス駅からサンドウィッチ（Sandwich）まで鉄道でゆき、サンドウイ

ッチの駅から町中へ移動してハイヤーを調達することになる。遺跡やその近くへゆくバス・サービスはなく、鉄道駅の前にタクシーが待機していることもない。遺跡はイングリッシュ・ヘリテッジの管轄下にあり、入場券販売所近くに小さな博物館とショップがある。要塞を囲む防壁とその外側と内側にある防御溝（濠）、それに防壁内部のいくつかの建築物の遺構から遺跡は成っている。1時間もあればざっと見学ができる規模で、決して大きな遺跡というわけではない。近くをストゥア川（River Stour）が流れるが、周辺は畑地と草地で、平原の中の少し小高い丘状のところにはぽつんとある遺跡である。それほど遠くないところに、せっかくの田園風景を台無しにする工場群が見えている。つまり、現在のリッチバラを訪れると、上に紹介したサトクリフの書いた古代末期の海に面した要塞、あるいは港としてのルトピアエとはまったく違う印象を受けることになる。実際、現在の海岸からは約4キロメートルも離れているのである。

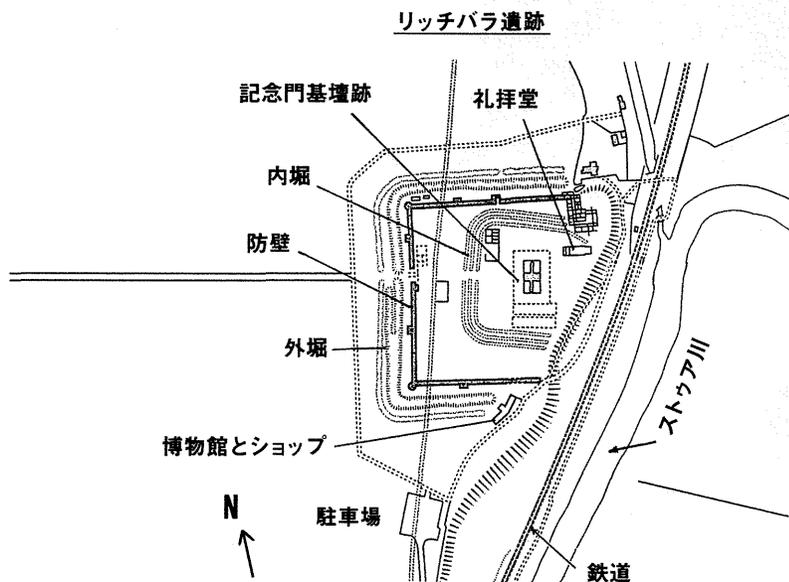
実は、このリッチバラを含むケント州北東端の地形は、ローマ時代と現在とは相当に違っている。州東端のサニト島（Isle of Thanet）は現在と異なり、ワンサム海峡（Wantsum Channel）によってしっかりとイングランドの陸地と切り離されていて、リッチバラはこの海峡の陸地側南東端に位置していた。ストゥア川は、カンタベリ方向からワンサム海峡の中央部に流れ込んでおり、ヨーロッパ大陸方面から来る船舶は、ワンサム海峡に入ってストゥア川を遡り、カンタベリやロンドン方面に向かった。したがって、リッチバラの要塞はヨーロッパ大陸方面からブリテン島心臓部への移動や輸送にとって要所にあたる。

ローマ時代に集落や要塞のあったリッチバラは、陸地に隣接して海峡に浮かぶ1.5キロメートル程度の長さの島であったと考えられており、現在の要塞遺跡とその周囲の小高い部分がそれに相当するようである。リッチバラの港は次第に堆積のために使用できなくなり、7世紀ころまでに現在のサンドウイッチにその役割を譲った。このサンドウイッチも、現在では海から離れている。



リッチバラの北西方向、北海に面した海岸沿いに、リカルヴァー（Reculver）の遺跡が残る。古代の名はレグルビウム（Regulbium）といった。ここは、紀元43年のクラウディウス帝ブリテン島侵攻時に陣地や港として使われたところで、鉄器時代の農場の遺構や遺物と並んで、ローマ支配初期時代の出土物も見つかっている。紀元3世紀、おそらく210年頃までに防壁ができ、170メートル×180メートルの要塞となった。このリカルヴァーは上に述べたワンサム海峡の北の出口の要塞として機能していて、南側の出口がリッチバラだったのである。

現在のリッチバラの地にローマ人が大々的に到達したのも、リカルヴァーと同じようにクラウディウス帝親征時であったようである。リッチバラの重要性はまずはその港としての機能にあったが、港のそばの小高い土地の周囲に簡単な堀と防御壁をめぐるし、木造陣地が築かれたらしい。現在の遺跡の中央部分や北東角あたりに、初期の宿舎や倉庫が発掘によって確認されている。



軍隊のブリテン島内部への移動と海からの物資供給の基地として次第に重要性を増したリッチバラは、紀元1世紀後半より陣営の内外が充実し始めた。とくに、紀元85年頃には、陣営の中心部に高さ約25メートルもの記念門が立てられた。紀元70年代の後半から80年代の初めにかけては、属州ブリタニアの総督を歴史家タキトゥスの岳父ユリウス・アグリコラが務めており、ローマ軍の支配領域が最も北へと拡大したときであった。この時期に築かれた巨大な記念物としての門は、ローマの勢力伸張を端的に表現するものといえよう。長さ（奥行）約10メートルの巨大なコンクリート・ブロックなどが見つかっており、4つの足を持ったであろう立派な凱旋門を支えるために、頑丈な基礎が必要だったことが判明

リッチバラ遺跡の防壁の内部

中央は記念門の基壇遺構、手前は遺跡中央部分を囲む内堀の跡



リッチバラ遺跡 防壁と外堀



している。ある考古学者は、建造のために4万トンの石材が必要であったと推測する。現在ではこの凱旋門は十字の形をした基礎部分しか残っていないが、イタリアより輸入したカララ大理石によるこの立派な門は、新しい属州ブリタンニアの玄関に相応しいものであったと思われる。この門から西に向かって街道が延びており、カンタベリ、そしてロンドンへと通じていた。後にいうワトリング道（Watling Street）である。

紀元2世紀になると、リッチバラは民間人の定住地や民間の交易のための港としての重要性も増してゆき、凱旋門の周囲に建物が増えた。リッチバラは陣営ではなく、集落になったのである。しかし、2世紀の中葉から、サクソン族、アングル族、そしてジユート族がブリテン島の南東海岸部を攻撃するようになり、リッチバラはそうした攻撃に備えて防衛態勢を取らねばならなくなった。3世紀に入って、250年頃には凱旋門やその周囲の建築物を囲むように濠ができ、集落は急速に要塞化してゆく。さらに、275年頃までには、今日見られる石造の防壁とその外側をぐるりと囲む濠が完成する。防壁は厚さ3.3メートル、高さも8メートルに達し、200メートル×250メートルの長方形の敷地を囲んでいた。

3世紀の末からブリテン島は帝国政治の激動に巻き込まれることになる。287年に英仏海峡の防衛を担当していたカラウシウスが中央政府に反乱を起こして自立し、皇帝を称した。293年にこのカラウシウスはアレクトゥスに殺害されたが、依然としてブリテン島の帝国からの離反は続いた。これを制して、296年にブリテン島をローマ帝国中央政府下に戻したのは、ディオクレティアヌス帝下で副帝となったコンスタンティウス1世である。しかし、後に正帝となった彼がブリテン島遠征中の306年にエボラカム（今日のヨーク市）で死去した際、軍隊が勝手にその息子コンスタンティヌス（後の大帝）を皇帝に宣言して、ディオクレティアヌス帝が始めたテトラルキア（四部統治体制）を崩壊させた。この後、324年にコンスタンティヌスが唯一のローマ皇帝となるまで、帝国の混乱は継続することとなる。

4世紀以降、リッチバラは軍事基地としていっそう重要となった。古代末期、おそらく395年頃の帝国行政を官職表の形で伝える史料『ノティティア・ディグニタトゥム』（Notitia Dignitatum）には、「サクソン海岸」（Litus Saxonicum）を防御するための軍隊が置かれた要塞の名が記録されているが、リッチバラはリカルヴァーとともにこの中に数えられているのである。「サクソン海岸」の名の下に、北からノーフォーク州、サフォーク州、エセックス州、東南端のケント州、さらにイングランド南部のイースト・サセックス州、ハンブリア州にかけて、9つの要塞があげられており、これらは通常「サクソン海岸堡警備司令官」（Comes Litoris Saxonici）の指揮下におかれ、海からの襲撃に対抗するものだったと理解されている。この時期、リッチバラには正規軍団の第2アウグストゥス軍団が駐屯していた可能性がある。

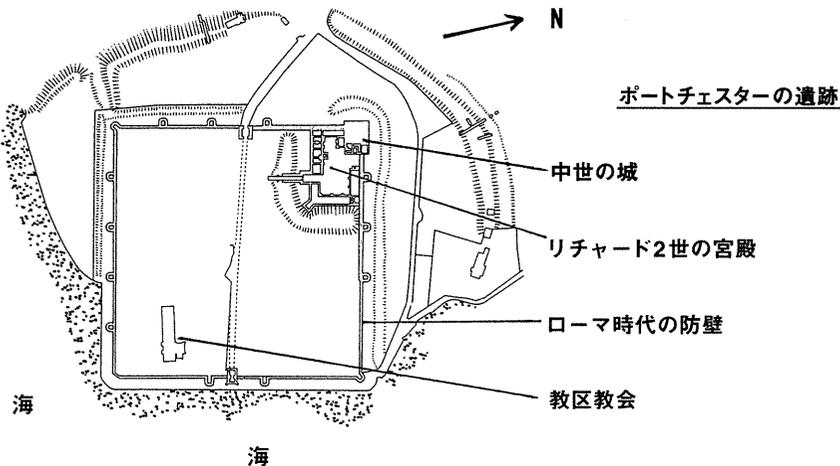
367年、歴史家アンミアヌス・マルケリヌスが「蛮族の共謀」と呼んだ国境外民族の帝国領北西部同時襲撃が生じると、ブリテン島は外民族の攻撃と帝国属州内での反乱で極度の混乱に陥ったが、将軍テオドシウスが来島して外民族を駆逐し、帝国支配を回復した。こ

の時、テオドシウスがブリテン島に上陸したのもリッチバラであったと考えられている。リッチバラで発見された5万6千枚にのぼるローマの貨幣のうち、実に2万5千枚までが、カラウシウス反乱直後の288年からブリテン島が完全に帝国から離反する直前の402年までのものであることは、後期ローマ帝国時代のこの期間にリッチバラが活発に活動していたことを窺わせる。先に引用したサトクリフの小説の一節は、こうした史実を背景として設定しているといつてよいであろう。もっとも、このリッチバラからの貨幣出土を根拠として、紀元5世紀前半にローマがブリテン島を再征服したという学説が立てられたことがあったが、現在では支持されてはいないようである。

3. ポートチェスター遺跡

私が紹介したいもう一つの遺跡は、イングランド南部、ハンプシア州のポートチェスター（Portchester）の遺跡である。この遺跡は、リッチバラと同様に、後期ローマ帝国時代にサクソン海岸堡警備司令官の指揮下にあった要塞の一つである。しかし、リッチバラとは異なり、現在でも海に面した要塞の防壁を残している。ポーツマス湾に面して立ち、要塞敷地の周囲をぐるりと取り囲むその防壁は、幅3メートル、高さ6メートル以上あって、ブリテン島内のローマ遺跡の中では最も保存状態のよいものの一つといつて間違いのないであろう。壁の所々に、後期ローマ帝国時代の防壁に特有の外側にせり出した塔（D型稜堡と呼ばれるもの）もあり、壮観である。リッチバラをはじめとするサクソン海岸堡警備司令官の指揮下にあった諸要塞が地形の点で今日では古代と大きく変わってしまっているのと異なって、ポートチェスターの要塞に関する地誌的情報には古代以来ほとんど変化がない。

ところが、防壁の内部はすっかり変わり、古代の要塞の跡は全くなくなっている。今日



ポートチェスター遺跡

城の上から見たローマ時代の防壁とポーツマス湾、中央にテューダー時代の倉庫の跡が残る



ポートチェスター遺跡 海に面した防壁と外にせり出した塔



見られるのは、正方形の要塞敷地の北西角にある中世に築かれた城の跡と、南東部分で敷地の四分の一を占めるセント・メアリ教区教会（及びその墓地）である。現在ポートチェスター遺跡は、「ポートチェスター・カースル」としてイングリッシュ・ヘリテッジの管理下で公開されているが、見学者は、ローマ時代の防壁ではなく、その内部にある中世の城跡を見に来るのである。

ポートチェスターは、先にふれた古代末期の史料『ノティティア・ディグニタトゥム』では、古代の名前をポルトウム・アダウルニ（Portum Adurni）と記録されている。この場所に要塞が築かれた正確な時期は不明であるが、これも先に言及したかの篡奪皇帝カラウシウスが発行した貨幣が出土していることからみて、この人物がブリテン島の支配権を握った280年中頃までには建てられていたと思われる。さらに、出土する貨幣から判断して、280年代から390年代までの約1世紀間、この敷地が使用されていた可能性があるが、367年以降の貨幣は数がたいへん少なくなっているため、367年に駐屯していた軍隊が移動し、この場所は軍隊の積極的な活動のために使用する要塞としての機能を失ったと考えられている。

現在の遺跡から推定するに、要塞はほぼ正方形（183×187.1メートル）で、3.43ヘクタールほどの広さがあり、防壁の外側に濠が掘られていた。要塞内部には、その中心で直交するように道路が作られていた。この道路から、要塞を囲む正方形の各辺の中央に作られた門を通して、外に出ることができた。4つの門のうち、北と南の門は幅3.3メートルほどの単なる出入り口であったようで、東と西の門が正式の要塞門として使われていたらしい。現在駐車場に近いランドゲイト（Landgate）と呼ばれている門と、海に面したウォーターゲイト（Watergate）と呼ばれている門がそれである。しかし、ローマ時代のポートチェスター要塞について遺跡から知られることは少ない。今日残された防壁があまりに良好な状態で残っているゆえに、かえって奇異な気がするほどである。

4. 遺跡史を描く必要

以上、粗く紹介してきた2つの遺跡は、理由は異なるものの、ともに古代の様子を直接伝えてはいない。リッチバラは地形の変化によって、海峡に面する要塞が今日では海から隔たった陸地に遺跡として残っている。ポートチェスターは海に接した要塞のまま防壁が残っているが、その内部には中世の城や教会とその墓地ができていて、古代の面影を失っている。いずれについても、現在遺跡を訪れて直ちに古代の様子を理解できる状態ではない。

ローマ時代のブリテン島については、その実態を記述した古典文学作品がわずかしかなかく、また小さな要塞についての文献の言及もほとんど皆無に近い状態である。したがって、考古学的な知見や遺構、出土物が、碑文や貨幣と並んできわめて大きな手がかりとなるが、歴史認識に必要なイメージ形成にはなんととっても残存する遺跡が有効であるから、今日

見られる遺跡の状態が上述のようであると、きわめて厄介なことになる。古代の構築物の上に後の時代の構築物ができておれば、発掘も十分できない。

ところで、上述の2つの遺跡は、古代の終焉後、どうなったのであろうか。

リッチバラの旧要塞敷地内には聖アウグスティヌス礼拝堂の遺構が残されているが、これは教皇グレゴリウス1世に派遣されたベネディクト派修道士アウグスティヌスが、597年にサニト島に上陸し、さらにカンタベリに司教座を設置して、初代司教となった(610年に大司教となる)布教活動を反映したものであろう。しかし、この後のリッチバラの要塞はよく知られておらず、近世初頭、テューダー朝期のイングランド最初の考古家と呼ばれるジョン・リーランド(1506?~1552年)に至ってようやく言及されることになる(その著書『旅行記』は1710年に刊行された)。彼は、その当時(1530年代後半から40年代前半)、この敷地の礼拝堂が教区の教会として使用されていたことを教えてくれている。リーランドは同時に、この敷地の「洞窟」状のもの存在を記しているが、それが後世の好古家、さらに考古学者の注意を引くことになった。すでに紹介した、要塞に紀元1世紀に建てられた記念門の遺構の一部である。

リッチバラの遺跡に関し、出土物の紹介を含めて考古学的な解説を初めて上梓したのは、ロンドンの薬剤師で、ロンドン市の考古学的研究や大英博物館の収集に貢献したチャールズ・ロウチ・スミス(1807~1890年)であった。1850年のことであり、その4年ほど前にこの遺跡の東側に接して鉄道が敷設されている。19世紀後半から発掘がしばしば試みられたが、遺跡に関して考古学上現在知られていることのほとんどは、1922年から1938年に、J・P・ブッシュ＝フォックスの指揮下でおこなわれた本格的な発掘のおかげで得られたものである。

リッチバラが面したワンサム海峡は、元来は2キロメートル以上の幅があったと考えられているが、バーダの時代(7世紀後半から8世紀前半)にはすでに600メートルになっていた。この海峡を最後に大きな船が航行したのは17世紀のことである。海峡は泥灰のために次第に埋まっていったが、それでも18世紀の地図にはまだケント州の陸地とサニト島ははっきりと切り離されており、その北端にリカルヴァーが、南端にリッチバラが描かれている。

一方、ポートチェスターについては、ローマ時代の終わりごろに要塞ができたため、ローマ時代の情報には乏しいが、その後については、リッチバラに比べて話題が多い。出土した陶器などから、ローマ帝国による使用が終わりとなってから、代わってサクソン人たちの共同体の居住地として使われ、1066年のノルマン征服に至るまで続いたらしい。904年にサクソン人たちの王であるエドワード(在位899~924年)がウィンチェスター司教から「ボルケアストラ(Porceastra)」を受領しているが、アルフレッド大王以来の政策を踏襲して、この地をヴァイキングからウェセックス王国を守るための城砦としたのであろう。

ノルマン征服後、ウィリアム征服王はポートチェスターをウィリアム・マンデューイ

(William Manduit) に与え、この人物がこの旧要塞に城を最初に築いた。1128年になると、ウィリアム・ドゥ・ラルク (William de l'Arche 1148年死) が敷地内にアウグスティヌス修道院を建てている。城には12世紀 (1130年代) に高さ30メートル以上あるキープが建てられた。やがてイングランド王が訪ねる場所となり、それに応じて建物の改変がなされた。

とりわけリチャード2世がこの城に、中世における最後の大きな改変をおこなっている。エドワード3世 (在位1327年～1377年) 治世に始まったいわゆる英仏百年戦争によって、イングランド南部のポーツマス湾に面するポートチェスターの意義はにわかにも高まった。1377年にわずか10歳でエドワード3世を継いだリチャード2世の時代は、フランスとの戦争に大きな動きはなかったものの、戦争そのものは継続中であったから、ポートチェスターの重要性に変わりはなく、1396～99年頃には王の滞在のための居室が城の中に作られている。「リチャード2世の宮殿」と今日呼ばれるこの部分は、造られた当時、大ホールや大居室、台所、礼拝堂などがしつらえられていたことが知られている。また、この時、キープ自体や門にも改造が施された。

城は16世紀のテューダー朝時代まで使用された。現在、要塞敷地の南部分に、テューダー朝期の倉庫の跡が残されている。その後は城が倉庫として使われる程度で、積極的な使用はなされなくなり、1644年の内乱中に軍隊が駐屯したが、やがて監獄としての役割を与えられるようになった。イングランドの中世の城が近代に監獄として使用されるようになるのは珍しいことではないが、ポートチェスターはいわゆる監獄というよりも戦争捕虜の収容所として使われた。

まず、1665年、英蘭戦争の捕虜約500名がここに収容された。教区教会も捕虜収容に使われたらしい。さらに、フランスとの長い戦争が生じると、フランス軍からの捕虜を収容したのである。それはナポレオン戦争の終わるまで続くこととなる。収容者の数はどんどん増え、1746年に1100名だったその数は、1747年には2500名に達し、戦時の捕虜の全イングランド内収容者数の4分の1を抱えていた。城の中の壁には、収容された捕虜によって書かれた落書きが刻み込まれている。

たいへん興味深いことに、1760年に、かの『ローマ帝国衰亡史』の著者エドワード・ギボン (1737～1794年) が、この監獄となっている要塞に、ハンプシア市民軍の将校として一時駐屯していた。ギボンはまだ23歳の若さで、スイス・ローザンヌから父の家に戻ってまもなくの頃であり、ハンプシア南部大隊の大尉として1760年から2年半の間、イングランド南部を移動していたのである。よく知られているように、ギボンはローマ市のカピトリノ神殿の廃墟の中に立って、古代ローマ帝国の衰亡の歴史を描くことを決意したと自身が記している。彼は若き日に駐屯したこの要塞が古代ローマの要塞の上に立っていて、要塞の周囲を囲む立派な壁がローマ時代後期のものであることを知っていたはずである。しかし、自伝には、この要塞に駐屯したこともそれと古代ローマとの関係も書いてはいない。ポートチェスターの要塞は、ギボンの時代、古代を感動をもって思い浮かべさせるよう

なものではまったくなくなっていたのかもしれない。

ポートチェスター城が戦争捕虜を預かる役割は1814年5月に終わった。それから20世紀の前半まで、この城は長く廃墟となるのである。バリー・カンリフが指導して発掘をおこなったのは1961年から1979年にかけてのことであり、3772平方メートル分の敷地が発掘の対象となっている。

以上、二つの遺跡のその後を紹介してきた。これは、精緻な調査を経たものではなく、簡単な参考資料に拠っただけのものに過ぎないが、私は古代を過ぎた後の遺跡の歴史の変遷を知ることが大事な作業と考えている。先に述べたように、遺跡から古代を認識することは、遺跡の状態によっては困難なことも多く、とくにここで紹介した二遺跡のように古代と現在との間に大きな変化が生じているケースではなおさらである。こうしたケースでは、出土史料や遺構の調査によって得られる直接的なデータのみが、他の遺跡から得られるデータと比較するために使用されることで満足しなければならないかもしれない。遺跡から古代を直線的に引き出すことは、少なくとも私には容易なこととは思われない。

しかし、考古学の専門家とは異なり、歴史学の徒にとっては、古代にその地が如何であったのかを知ることだけでなく、その地が古代の終焉後に如何に利用され今日に至っているかを知ることが重要なことであり、それを精査して始めて、古代遺跡についての理解も確実になるのではなかろうか。遺跡に関する叙述を古代の段階で止めず、その後、とくに20世紀以降に本格的な考古学調査が始まるまでの、いわば「遺跡史」といってよいものを描く必要性を強調したいのである。例えば、ポートチェスターなどその後の歴史的な展開がよく知られているところでは、この要塞が如何に使用されたかを知ること、古代におけるその機能についても、それをより深く理解するための糸口が得られるだろう。また、人々がローマの遺跡に接する方法や感情を調べる作業は、イングランドの人々の古代ローマ、ひいては古代文明に対する認識や価値意識を知る上でも貴重である。

そもそもイギリスの場合、16世紀以降、とくに18世紀から好古家の活動が活発になって、古代遺跡についてかなり豊富な記述を目にすることができるようになる。彼らの活動した時代には、現在よりもはるかに良好な状態で遺跡が残っていた可能性があり、その記述は今日の考古学発掘による知見と並んで歴史家は重視すべきであろう。遺跡の歴史を辿ることは、現代の発掘では得られない情報を手に入れることができる大切な手段である。

同時に、好古家の活動と近代的な考古学研究や発掘活動がどのように結びついていったのか、さらにそうした歴史・考古学研究が人々の歴史を通じた自己認識にどのように影響を与えたのか、こうした近代史の重要な問題についても、単なる好古家の記述を追っただけでは理解される範囲と深度は限られる。かつて好古家が訪ねた遺跡を実際に調査し、古代の実態と好古家の書いた記述を比較したり、好古家からより新しい時代までの遺跡の変遷を調べたりすることで、好古家の意義や彼らの及ぼした影響もより深く理解されるであろう。

遺跡そのものについての紹介や議論は、これまでほとんど考古学者によってなされてきた。しかし、これからは、遺跡が辿った歴史を書くことによって、歴史学者もこの分野に参入すべきではないだろうか。文献学の訓練を受けた歴史学者が、その遺跡の歴史を正確に記述し、学界にそれを提供すれば、考古学者の発掘成果とともに、古代の認識に大きく寄与できるであろう。ヨーロッパ諸国では、古代遺跡の古代以降の歴史は詳細に書かれてきたが、その大半が自国史の枠の中で書かれているため、客観化が充分なされているとは言い難い。したがって、非ヨーロッパ人の立場から遺跡の歴史を書くことは充分な価値がある。近年の西洋史研究の動向を考えれば、そろそろ日本の西洋古代史研究者がこの分野で独自の業績を発表することも可能であろう。

本小文の冒頭で、遺跡を訪ねた西洋古代史研究者がそこで出来る独自の作業は何であろうかを書いた。考古学者でない歴史学者が遺跡を訪れて積極的にできることのひとつは、遺跡を通じて古代を調べるだけでなく、その後の歴史もあわせて調査し、「遺跡史」を書くことではないかと私は強く感じている。

参考文献

- Bushe-Fox, J.P., *Excavations at the Roman Fort at Richborough* vol. 4, Oxford, 1949
 Cunliffe, B. (ed.), *Excavations at the Roman Fort at Richborough* vol. 5, Oxford, 1968
 Id., *Excavations at Portchester Castle*(Society of Antiquaries Research Reports Series),
 vol. 1~2, London, 1975~76
 Dark, K. & P., *The Landscape of Roman Britain*, Stroud, 1997
 Dark, P., *The Environment of Britain in the First Millennium A.D.*, London, 2000
 Esmonde Cleary, A.S., *The End of Roman Britain*, London, 1989
 Goodall, J.(English Heritage), *Portchester Castle, Hampshire*, London, 2003
 Harris, S.(English Heritage), *Richborough and Reculver, Kent*, London, 2001
 Higham, N., *Rome, Britain and the Anglo-Saxons*, London, 1992
 Johnson, S., *The Roman Forts of the Saxon Shore*, London, 1976
 Maxfield, V.A., *The Saxon Shore: A Handbook*, Exeter, 1989
 Philp, B., *The Excavation of the Roman Fort at Reculver, Kent*, Kent, 2005
 White, D.A., *Litus Saxonicum: The British Saxon Shore in Scholarship and History*, Madison, 1961
 Wilson, R.J.A., *A Guide to the Roman Remains in Britain*, 4th ed., London, 2002

ローマン・ブリテンの全般的状況については、最新の叙述David Mattingly, *An Imperial Possession: Britain in the Roman Empire, 54 BC-AD 409*, London, 2006と新しい案内書M. Todd (ed.), *A Companion to Roman Britain*, Oxford, 2004を、邦語では拙著『海のかなたのローマ帝国——古代ローマとブリテン島——』岩波書店、2003年、及びピーター・サルウェイ(拙訳)『古代のイギリス』岩波書店、2005年をさしあたり参照されたい。

※この研究ノートは、科学研究費補助金基盤研究(C)(南川高志代表)による研究成果の一部である。

※小文中の図はイングリッシュ・ヘリティジのガイドブックに基づいて作成した。写真は筆者自身が写したものである。